

眠り王子の抱き枕

Yumeno & Suguru

玉紀直

Nao Tamaki



エタニティ文庫

目次

眠り王子の抱き枕

5

眠り王子のご奉仕要求

315

書き下ろし番外編

眠り王子の壮大な計画

329

眠り王子の抱き枕

プロローグ

いったいどうしてこんなことになっているのだろう……

仮眠室のベッドに横たわったまま、夢乃は緊張で身を固める。

動けない。いや、動いてはいけない状況なのだ。

夢乃がちよっとでも身動きすれば、彼女を抱きしめて寝息を立てている人物を起こしてしまうかもしれない。

いやむしろ、起きてくれたほうが夢乃にとってはいいのかもしれないが……

(なんでこんなことになってるわけ……?)

心に浮かぶのは疑問ばかりだ。

徹夜で企画書を詰めていた夢乃は、始業時刻まで休もうと同じフロアの仮眠室へやってきた。簡易ベッドのひとつに潜り込み、付属の目覚まし時計を一時半後にセットしたのは覚えている。

それが、ふと目を覚ましてみると、同じベッドに自分を抱きしめて眠る男性がいたのだ。
 一瞬にして眠気が吹き飛んだのは言うまでもない。それ以上に驚いたのは——
 (どうしてここに副社長!?)

同じベッドで眠っているのは、夢乃の勤める会社の副社長——蔵光優だった。

三十一歳の若き副社長は、社内でも有名な美丈夫で、多くの女性社員が憧れている男性だ。かくいう夢乃も、その一人である。

だからこそ、わからない。

なぜ、彼が夢乃に抱きついて眠っているのだろう。

(ま……まさか……、なにかやましい考えが……っ!!)

不意に頭に浮かんだ可能性に、ぎくりと身を強張らせる。それじゃなくたってベッドの中で男性に抱きつかれるなんて経験は、二十五年間生きてきて初めてのことなのだ。

焦る気持ちを抑えつつ、夢乃は相手を起こさないようそっと副社長の顔を窺い見た。

そこには、安らかな顔で寝息を立てている副社長の姿。それはもう起こすのが忍びないほどの安眠ぶりである。

一瞬で貞操の危機を否定した夢乃だったが、今の状況が変わったわけではない。

(うう……タイマーまだ鳴らないのかな)

すっかり目が覚めてしまった夢乃は、まんじりともせずただ副社長の目覚めを待つ

だった。

第一章

（びっくりした！ 本当にビックリしたあ!!）

長谷川夢乃は勢いよく飛沫を飛ばしながら、化粧室の手洗い場で顔を洗う。水の冷たさが気持ちいい。

先程までの気恥ずかしさを洗い流すように、何十回目かの水を顔に浴びせた。

肩で息をしながら顔を上げると、鏡には、頬を赤くした自分の顔が映っている。

勢いよく顔を洗ったため、顔どころか前髪やサイドに垂らした髪も濡れ、雫がぼたぼたとブラウスを湿らせていた。

始業時刻前に化粧を直すのはもちろんだが、どうやら着替えも必要らしい。

夢乃は、目を閉じてハアッと大きく息を吐く。

——胸の鼓動が、まだ治まってくれない。

（落ち着かなくちゃ……落ち着け……）

自分に言い聞かせるように何度も繰り返す。だが……

「落ち着けるわけなんかないじゃない……」

ポロリと本音を吹き、鏡の中の夢乃が情けない顔をする。

「なんなの……副社長……」

頭の中に先程の出来事がよみがえる。同時に副社長にベッドの中で抱きしめられていた感触まで思い出してしまい、身体が震えた。

——ここ、株式会社ナチュラルスリーパーは、自社独自の寝具を企画開発、製造、販売する会社だ。全国主要都市に支店を持ち、自社店舗も展開している。

二年前、ナチュラルスリーパーの本社に配属された夢乃は、以来ずっと企画開発課に籍を置いていた。企画開発課のある六階のフロアには、仮眠室がある。

仮眠室といっても、徹夜で働いた社員が仮眠をとる場所……という意味ではなく、新商品や試作品を試したり研究したりするのに使用する場所である。

つまり、『仮眠室』でなく、『試眠室』といったほうが正しいだろう。六階の他にも、三ヶ所設置されていた。

そうはいっても、夢乃のように白熱したミーティングのあと、ハイテンションのまま仕事をして夜を明かしてしまった社員などが、仮眠のために使うことも稀にある。

その稀な機会に、ハプニングが起こったのだった。

副社長に抱きしめられたまま、夢乃は一時間はジツとしていたような気がする。プライベートで男性とつきあったことのない夢乃は、この状態で平気で眠るなんて強い精神は持ち合わせていない。おかげで、休むどころではなくなってしまうた。

——まあ、そのあいだ、副社長の寝顔に見惚れていたのだが……
副社長は、その洗練された物腰と整った容姿が人気の男性だ。

——そんな彼の寝顔は、なんと穏やかで無防備なことか……

仕事中は怖いほどの威圧感があるというのに、眠っているときは思わず守ってあげたくなるような雰囲気醸し出していた。

不覚にも一瞬「かわいい」と思ってしまったくらいだ。

(イケメンは寝ててもイケメン……ってこと……?)

緊張で石のように固まった夢乃は、気を紛らわせようと心でおどけてみせる。

そうしているうちに、副社長——蔵光優が目を覚ましたのである。

「あれ……、君は……」

うっすらと開いた双眸が夢乃を見る。その瞬間、固まっていた背筋がピンと伸びた。

「あの……、わたし……」

「たしか、企画開発課の……長谷川さん、だったな……」

夢乃は驚いて目を見開いた。確かに昨日、新商品の企画の件で直々に激励してもらっ

たが、それもほんの数分だけだ。まさか、副社長が自分の顔を覚えてくれているとは思わなかった。

「ここで、なにをしている?」

「なにを、って……あの……」

夢乃は言葉に困る。どちらかといえば、なにをしている、は夢乃が言いたいセリフだった。

「えーと……、少し仮眠を取ろうかと思って……」

「眠れたのか?」

「そっ……それなりに」

この状況で眠れるわけがないでしょうと心の中で叫びつつ、当たり障りのない答えを口にする。

だが、今まで以上に夢乃の心臓はドキドキと暴れ回っていた。

目を覚ましたというのに、副社長は一向に夢乃から手を離してくれないのだ。かといって、夢乃から離してくださいと言っていいものなのだろうか。

「眠れた……って顔はしていないな」

クスリと笑われ、咄嗟に言葉が出てこない。

誰のせいだと思っっているんですか! という気持ちより、そんなに酷い顔をしている

のだらうかと、そっちのほうにシヨックだった。

「あゝ、よく寝た……」

そう言って、副社長が身体を起こす。やっと腕の中から解放された夢乃は、安堵でぐったりと頰ほほれてしまう。

「久々に……寝た、つて気がする……」

片手を額ひたいにあて目を細める様子は、はたから見ればとても素敵な表情だと思う。だが、夢乃はそれより彼の言葉のほうに気になった。

（久々に？ 寝た？ つて、なに……）

夢乃が寝るときにかけたアラームはまだ鳴っていない。副社長がいつこへ来たのかは知らないが、夢乃が寝入ってからだとすると、まだ一時間半も経っていないはずだ。

「すまなかつたな」

「え？」

いきなり謝られ、夢乃は慌てて身体を起こす。

「正直なところ、仮眠室に誰かがいるとは思わなかつたんだ。朦朧もうろうとしたままベッドに倒れ込んで、無意識に手元にあつたものを引き寄せたから、てっきり枕だと思つていた」

「……枕……ですか」

ついつい乾いた笑いが漏れる。

無意識で抱き枕にされていたなんて、一人でドキドキしていたのが馬鹿みたいだ。それなのに鼓動はいまだスキップしているかのようにリズムを刻んでいる。

「は……だ、抱き枕はお役に立てましたか？」

思わず皮肉っぽい言葉が口から出てしまう。しかし副社長は、満足げに笑顔を見せた。

「ああ、君の抱き心地は最高だった！」

「抱きつ……！」

夢乃はギョツとして目を白黒させる。

夢乃の様子から、おかしな意味に取ったと気づいた副社長がクスリと笑った。

「……抱き枕として、だが？」

「わっ、わかってますっ」

「重役用の仮眠室でも自分の執務室でも眠れなかつた。だがここでは眠れた。それを考えれば『抱き心地が最高』と言いたくなる」

「そ、そうですか……」

それにしただって、すごく誤解を招きそうな言い回しである。

そのとき、仮眠室用目覚ましのアラームが鳴りだした。急いで手を伸ばして止めているあいだに、副社長がベッドから下りる。

彼はスーツの上着を羽織りながら大きく息を吐いた。

「悪かったな、君の仮眠の邪魔をしてしまった」

「い、いいえ、そんな、とんでもないっ」

夢乃は目覚まし時計を持ったまま、慌てて胸の前で両手を振る。

本来なら笑って流せる事態ではないのだが、イケメンに申し訳なさそうに謝られると、なぜかこっちが悪いことをしてしまったような気持ちになる。

「ふ、副社長は会社にとって大切な方です。こんな枕で少しでもゆっくり眠れたなら、よかったです」

その気持ちに嘘はない。抱き枕にされたことはおおいに戸惑うが、ひとまずそれは深く考えないことにした。

にっこり笑ってそう口にした夢乃に、副社長はネクタイを直す手を止め、なぜかちょっと驚いた顔で見てくる。

その視線に、なにかおかしなことを言ったのだろうかとドキリとする。だが次の瞬間、彼はぶっと噴き出した。

「いい枕だった。ありがとう」

嬉しそうな、でもどこか照れくさそうな微笑みに、夢乃はほわっと頬が温かくなるのを感じた。副社長のこんな表情を見られて役得だと思いつつも、高鳴りを増す鼓動を持

て余してしまう。

「いいえ、そんなっ、こ、こんな、つまらないものでよろしければ、いつでもお声をかけてくださいっ」

動揺のあまり、咄嗟とつさにそう言うてから、しまったと思う。

しかし副社長は、機嫌よく微笑んだまま軽く片手をあげ仮眠室を出ていったのである……

——あれはさすがに、調子に乗ったかもしれない。

(いつでも抱き枕になりますよーって言ったも同然だもんね)
先程の自分の発言を思い返し、にわかに羞恥しゆうち心が騒ぎだす。

大きな溜息とともに、夢乃は洗面台の前で頭を抱える。せっかく水で冷やした頬が再び熱を持ち始めるのを感じて、夢乃は足早に化粧室を出た。

気持ちを切り替え、そのまま斜め向かいにある給湯室へ向かう。

んーっ、と大きな伸びをしながら給湯室へ入っていくと、寝不足の頭に響く大きな声が聞こえた。

「夢乃ちゃん、お疲れー。仮眠してたんだった？ ゆっくり休めた？」

給湯室の中には、一年先輩の村上梓むらかみあずさがいた。同じ企画開発課で、所属するチームは違

えど、いろいろと世話を焼いてくれる超フレンドリーな先輩だ。しかし、今日ばかりは彼女の高い声があつく感じる。

シンクから離れて夢乃の前までやってきた梓は、顔を見るなりハッと表情を改めた。

「眠れなかったの？」

「どうしてそう思うんですか？」

「だって……、なんだか血走った顔してるもん。着替えもしてないしメイクもしてない。どしたの？ ミーティングの興奮が消えない？」

血走った目をしている、ならわかるが、血走った顔とはどんな顔だろう。

そんなことを疑問に思いつつ、夢乃は両手で自分の頬をべしべしと叩いた。

「眠れなかったけど大丈夫です。神経が昂たかまっているんで、今日はこのテンションで仕事しますよ！」

「張り切ってるねー。やっぱ、副社長から直じき々に褒ほめられたのがきいてるのかな」

副社長。その言葉に、夢乃の鼓動は大きく跳ね上がる。治まりかけていたドキドキが復活しそうだ。

そんな自分を落ち着かせるため、夢乃は深呼吸をして食器棚に向かった。

「そうですね、あんなこと初めてだったし、張り切っちゃいます。新商品の企画、無茶苦茶頑張りますよっ」

「今回は、枕ピローチームの大仕事だもんね」

「はいっ」

夢乃がいる企画開発課のピローチームは、半年前に副社長直じき々に新商品立案を指示されていた。出された企画は絞りに絞られ、最終的に選ばれた企画が来月六月末おこなに行われる社内プレゼンの権利を得るのだ。

そろそろどの企画が選ばれるか決まるころだろう。決まれば、あとはチーム一丸となってプレゼンまでにその企画を商品として詰めていくのみだ。

「とりあえず、コーヒーでも飲んで、しゃっきりします」

「ああ、そうそう、主任がコンビニでサンドイッチとコーヒーを買ってきてくれたみたいよ？ お金出したのは課長みただけど、ピローチームみんなにだから、夢乃ちゃん 데스크にも置いてあるからね」

「ほんとですか？ 嬉しいー。でも、それとは別に、こう……五臓六腑ごそうろくぷに沁しみ渡るような苦いコーヒーが飲みたい気分なんです」

「もー、そんなのばっか飲んでー。胃が悪くなるよー？」

少々呆れた様の声を聞きながら、夢乃はコーヒーの用意を始める。フィルターに多めのコーヒーの粉を入れ、ケトルでお湯を注そそいでいった。

コーヒーが落ちるのを待ちながら、何気なく腕時計を確認すればまだ八時。

始業時刻は九時なので、給湯室でひと息ついてから身支度を整えても、サンドイッチをつまむ時間はあるだろう。

特別濃いめに淹れたコーヒーには、砂糖もミルクも入っていない。

「にがつ……」

当然、眉間に皺が寄るほどの苦さだ。

でも、目的は美味しいコーヒーを飲むことではなく、脳と身体にちょっとした刺激を与えることなので、このくらいがちょうどいい。とはいえ、……梓が言ったように、あまり健康的な方法でないことは承知している。

夢乃は苦いコーヒーをすべて飲み干し、ほっと息を吐きながらカップを置く。パンパンと両手で頬を叩き、「よしっ!」と気合を入れた。

そうして振り返ると、梓がお茶を煎れる用意をしていた。

「梓さん、それって苦いお茶ですか?」

「まさかー。夢乃ちゃんみたいにM^{エム}つ気のある目の覚ましかたはしません。それに、これは課長のみよ」

「そうですか……。つて、なんですか、M^{エム}つ気つて!」

「自分をいじめて目を覚ますとか、ありえないよー」

「そこまで大げさなものじゃないですよ」

梓が笑いながら夢乃が使っていたケトルを手に取り、急須にお湯を注いだ。

「そういうえば課長がさ、今日、仕事が終わったら飲みに連れていってくれるって言ってたけど、夢乃ちゃんどうする?」

「今日ですか? どうしようかな……。連れていってもらえるのはすごく嬉しいんですけど……。眠くならなかったら行こうかな」

今は寝不足からくる興奮状態で目が冴えているが、定時以降もこの状態が維持できるかというところが微妙だ。

「うんうん、夢乃ちゃんはそうだよね。お給料日だから課長の気前がよくなっているのは嬉しいけど、ピロー開発チームは昨日遅くまでミーティングしてたみたいじゃない。タイミングが悪いよねえ」

「お給料日……」

梓のその一言で、夢乃は大切なことを思い出した。

「夢乃ちゃん、お昼休みに仮眠とったら? それで元気になったら飲み……」

「昼休みに仮眠をとる暇は……ないかなあ……」

「え、なにか急ぎの仕事? もしわたくしで代われるなら代わるよ」

梓は寝不足の夢乃を心配してくれているのだろう。自分の仕事もあるだろうに、そんなことを言ってくれる。

「違うんです。仕事じゃなくて、アパートのお家賃を入金してこなくちゃいけない。ついでに、現金も下ろしてきたいし……」

「あー、毎月の家賃が銀行振込みなんだっけ。なかなか手間だね。現金も下ろしに行くなら、入金を代わるわけにはいかないかあ」

梓の心遣いがありがたく思いながら、夢乃はゆすいだカップに余ったお茶を注いでもらい、それを一気にあおる。そして、夢乃は梓に向かって親指を立てた。

「ありがとうございます。大丈夫です。あと、奢りは一人暮らしに魅力的なので、カフェインで目を覚まして絶対参加しますよ」

笑顔でちゃっかりそう宣言すると、梓も笑って親指を立てた。

仕事に入り午前中はなんとか気合で乗りきったものの、ときどき不意に襲ってくる眠気には不安が募る。

お昼休みの用事をできるだけスピーディーに済ませれば十分くらい仮眠ができるのではないだろうか。そう考えた夢乃はお昼になったと同時に席を立ち、一番の目的である銀行へ走った。

だが到着した瞬間、彼女の仮眠計画はもろくも崩れ去る。

多くの会社がお給料日である今日、数台のATM機の前には長蛇の列ができていた

のだ。

（駄目だ……こりゃ）

自分の考えの浅はかさに苦笑いを漏らしつつ、列の最後尾につく。仮眠どころかコンビニでお昼ご飯を買って会社に戻るくらいが関の山だろう。

ATMコーナーで家賃の振り込みと現金の引き出しを終えたところで、突然スマホの着信音が響く。夢乃はドキッとして思わず手にしていたクラッチバッグを胸に抱いた。

通話を答められる場所ではないにしても、なんとなく気まずい気持ちにさせられるのは確かだ。

夢乃は急いでキャッシュカードと入金明細書をATM機から引っこ抜く。

今日の銀行は人で溢れている。夢乃は少しでも着信音が響かないよう、スマホが入ったバッグを胸に強く抱いて銀行を出た。

「もう、今出るってば」

いつまでも鳴り続ける着信に文句を言いながら、スマホを取り出し応答する。急ぐあまり、相手を確認するのを忘れてしまった。

『夢乃、出るが遅い』

少し苛々した声だ。つい、こちらの状況も考えてよと文句を言いたくなる。

『どうした？ 昼休みまでこき使われてるのか？』もしかして、昼飯を食べる時間もも

「ええ、ないのか？ 酷いな。辞めてしまえ、そんな会社っ」

「ちよっ……待って、待ってよ、お兄ちゃんっ」

一方的にまくし立てられ、夢乃はまた始まったと思いながら、兄——慎一郎しんいちろうの言葉を止めに入る。

「違うよ、銀行のATMにいたの。これでも、急いで電話に出たんだよ？」

『ATM？ ああ、今日は給料日か。わざわざ混んでる銀行に行かなくても、帰りにコンビニで下ろせばいいだろう』

「お家賃の振込みがあったの。最近仕事が忙しいから、気がついたときにやっておかないと忘れちゃうし」

『いつまでたつても引き落としにしてくれない大家のか。そんな所やめて、俺のマンションに引っ越してこい。部屋も余ってるんだから』

「に、二十五歳にもなって、お兄ちゃんと暮らしてるとか、……恥ずかしいよっ」

『なにが恥ずかしいか、馬鹿者。かわいい妹を心配してるだけだろう』

「調子いいなあ、もう」

『大学のときは一緒に住んでたろう』

「二年間だけじゃない」

大学入学後、最初の二年間は兄のマンションで一緒に生活していた。なんといつても

大学から近かったからだ。しかし三年生になるころ、慎一郎の海外赴任が決まったため、夢乃はマンションを出て実家住まいに戻った。

「それに、お兄ちゃんのマンションは会社から遠いしね」

軽い調子で話してはいるが、慎一郎が言っているのが決して冗談ではないこともわかってはいる。

七歳年上の慎一郎は、年の離れた妹をいつも気にかけてくれていた。昔から、すごく妹思いの兄なのである。

こうしてちよくちよく電話をかけてくるのも、一人暮らしをしている夢乃を心配してなのだ。

……ただ、それだけではないことも、夢乃にはわかっていた。

「お兄ちゃん？ ご飯は食べたの？ お兄ちゃんこそ、缶コーヒー一本で済ませた、とかじゃないでしょうね？」

『俺はこれから会食だ。昼間っからフランス料理らしいぞ』

「うわーっ、羨ましいー。あ、でも、今は無理だなあ……寝不足でフレンチなんてすぐ胸焼けしちゃうぞう」

『寝不足？ ゲームでもしていたのか？』

「ミーティングが白熱しちゃってね。昨夜は会社で徹夜……」

『社員を会社に泊まりこませるなんてとんでもない！ 今すぐ辞めてしまえ!!』
電話口で怒鳴られて、夢乃はハツとする。これは失言だったかもしれない。
慎一郎は事あるごとに夢乃に「辞めてしまえ」と言ってくる。

その理由は、ただひとつ……

「もう、お兄ちゃん、いくらライバル会社だからってそんなふうにも悪く言わないでよ」

『おまえがナチュラルスリーパーなんかに入社するからだろう。今すぐ辞めてうちの会社にこいつ。今なら人事に手を回してやる』

「やだよつ。そんなコネ入社みたいなことつ」

『あああつ、二年前、俺が日本にいなかったばっかりにいいつ』

「もういいよ、それ……」

兄のこの言葉を、これまで何度聞いたことだろう。

慎一郎が勤める株式会社綿福は、寝具メーカーの大手企業だ。

夢乃の勤めるナチュラルスリーパーとは、ライバル関係にある。

実のところ、夢乃は就活の際、綿福にエントリーしていたのだ。だが、内定をもらうことができなかった。しかし同時に受けていたナチュラルスリーパーからは内定をもらったのだ。

兄の会社のライバル社だという認識はあったが、内定をもらえるなら選り好みしてい

られないというのが本音である。

実際に入ってみれば会社の雰囲気もいいし、待遇に不満もない。夢乃はナチュラルスリーパーが好きだった。

しかし妹が入社したことが、慎一郎のナチュラルスリーパー嫌いに火を点けた。

海外赴任中だった自分が日本にいれば……いや、部長となった今なら、人事部で出世した同僚に口添えできるからと、事あるごとに兄は言ってくるのだ。

（お兄ちゃんには、最初、綿福にもエントリーしていたと言っただけ……、悔しかったのかもしれないけど）

意地悪で言わなかったのではなく、内定がもらえたときに「お兄ちゃんの会社に入るからね!」と言っただけで、驚かせようと思っただけなのだ。

妹なりのかわいい迷惑。しかし、それが逆効果になってしまった。

「ライバル会社を毛嫌いする気持ちはわかるけどさ、妹が頑張ってるんだから」

『おまえが頑張ったところでもなにか大きく変わるものでもないんだから。あまり無理するなよ』

慎一郎の言葉を聞いた瞬間、チクリ……と、胸に痛みが走った。

兄は心配してくれているだけだ。わかっているが、素直に感謝できない自分がある。頑張っていると口でアピールしても、実際結果には結びつかず実績らしきものもない。

エリートの子には、それが無駄な頑張りに見えているのではないか。

どうせ無駄なら、夢乃が無理をする必要はないのに、と。

夢乃は夢乃なりに頑張っているが、兄にはそれが伝わらない……

『……おい、夢乃！ 急に無言になってどうした？』

慎一郎の声にハツとする。考え込むあまり、つい黙り込んでしまった。

「……うん、なんでもない。そんなことより、妹が頑張つてると思うなら、今度ご飯でも食べに連れてってよ。ね？ お兄ちゃんっ」

わざと意識して、甘えるようにかわいらしく言う。その直後、一瞬黙った慎一郎だったが、すぐにコホンと咳払いをして、妹を食事に連れていくことを承諾したのだった。

翌日。昨日は、根性で一日の仕事を終え、課長持ちの飲み会にもすっかり参加した。そのまま、いい気分で帰宅し眠りについたので。

おまけに今日は、夜勤扱いになったミーティング分の半休で、朝はゆつくり寝ている。それ。

ナチュラルスリーパーは、業務の関係上、夜勤が認められている。だが、翌日か翌々日には必ずその分の半休がもらえるのだ。

夢乃は、目覚ましをいつもより大幅に遅らせてセットし、今朝はのんびりとお布団の

中の住人を決めこむことにしていた。

しかし、突如部屋に響き渡ったドアチャイムの音が彼女の眠りを妨げた。

(誰よ……、こんな早くから)

不満いっぱい枕元の時計を見ると、普段なら出勤準備をしている時刻。なので、本来ならば、それほど早くから……ではない。

この時間ではさすがに居留守を使うこともできず、夢乃はもそもそと起き出しインターフォンを取った。

「はい……どちら様ですか……」

『おはよう、長谷川さん。管理人のおおやです』

「あっ、おはようございます」

何度聞いても、管理人で、おおや、という名前に突っこみを入れたくなりながら、夢乃は挨拶を返す。

『出勤前にすみませんね。ちょっと確認をしたいだけなので、出てこなくてもいいですよ』

普段は話しかたも雰囲気もおっとりとした老婦人なのだが、今日はなんとなく口調が荒い。荒いと感じるのは、いつもより早口で慌てている様子が窺えるからだろうか。

『長谷川さん、今週末は何の日か、わかってますよね？』

「今週末……?」

なにかあっただろうか。管理人がわざわざ確認に来るということはアパートか町内会に關係したことか。

ゴミ置き場でも変更されるのかな、とぼんやり考えていると、衝撃の一言が聞こえてきた。

『アパートの取り壊しが始まる日ですけど、部屋を出る準備はできてます?』

「……は……?」

取り壊し……とは、なんのことだろう。夢乃にとっては寝耳に水だ。

『昨日、長谷川さんから家賃の振込みがあつて、驚いたんですよ。他の人はもうほとんど出て行つてくれるけど、長谷川さんはちつとも引越しの準備をしている心配がないと思つて。……いえ、粗大ごみも出ていないし、なんの連絡もないんでそう思つただけなんですけどね。……でも、……ちゃんと準備はできていますよね?』

最後はまるで探るような口調だった。対する夢乃は言葉も出ない。

これは、つまりアパートを取り壊すから部屋を出ていけ、ということなのだろう。

「あ、あの……すみませんけど……、それ、いつ決まつたんですか……? わたし、まつたくの初耳で……」

寝起きで乱れた髪を掻き回しながら、夢乃はインターフォンにかじりつく。

聞いてない聞いてないそんな話! と大声で叫びたい気分だ。状況を認識するに従い、どんどん焦つてくる。

それは、管理人も同じらしかった。夢乃が退去準備をしていないどころか、アパートの取り壊しも知らなかったと知れば当然だろう。それを裏付けるように、インターフォンから聞こえる声が急に大きくなった。

『半年くらい前から掲示板にお知らせの紙を貼っていたでしょう。それに、郵便受けにも、知り合いの不動産屋さん頼んで部屋の斡旋あつせんもします、つて案内を入れていたわよね』

「半年くらい前……」

そのころは確か、夢乃が所属するピローチームが大型案件用の企画を副社長から任されて忙しくなつたころだ。

チームではそれぞれが企画を提出し、社内プレゼンにかけるものを検討していくことになつた。

毎日のミーティングや企画立案、リサーチとデータ収集に、熱の入つたディスカッションが続き、朝から晩まで奔走していた。とにかく忙しかったことしか覚えていない。悪いが掲示板など目に入つていなかった。

それに郵便受けに案内の紙を入れておいたと言われても、明らかに必要とわかる封書

以外はダイレクトメールだと思って、ほとんど確認もせずに捨てていた。

その中に、取り壊しに関するお知らせが入っていたらしい。

アパートの住人が引越していたことにも気づけなかった。それじゃなくてもそれほど交流はない。朝早く出社して夜遅く帰宅する生活を続けていれば昼間の引越しに気づけるはずもない。

サーッと一気に血の気が引いた。のんきに半休の幸せに浸っている場合ではない。

『土曜日には業者さんが入りますからね。それまでに……』

「土曜日……!」

今日はいったい何曜日だったか。混乱する頭で考える。

（水曜日だ。土曜日には部屋を出ていなくてはならないということは、金曜日には引越しを済ませなくてはならないということ……無理っ!）

すぐに答えは弾き出される。今日を含めて、実質たったの三日でどうしろというのだ。部屋を探して引越す準備をして……すぐに部屋が見つかるかわからないうえ、引越し業者だつて都合よく手配できるかもわからない。

なにより、仕事が忙しくてそんなことに時間を割いている暇はない……

「す、すみません……、あの、もう少し、あと一週間、いや、五日でいいんで、部屋を出るのを待ってもらえませんか!」

もう少し、もう少し時間があれば。夢乃は必死になって頼み込むが、大屋の考えは変わらない。

『困りますよ。土曜日に業者さんが入るって言ったでしょう。あなた一人の都合でそれを延ばすことなんかできませんよ』

……まったくもって、ごもつとも……である。

『お知らせは随分前からしてあったし、それを見落としたのは長谷川さんの落ち度でしょう。悪いけど、よろしくお願いしますね。早々に部屋を出てくださいね』

情状酌量の余地はないとばかりに言い捨て、大屋は部屋の前から立ち去っていった。

……なんということだろう。

あまりのことに、がっくりと脱力した夢乃はインターフォンに額を思いっ切り打ちつけてしまったのだった。

頭も痛い、胃も痛い。よく考えすぎると胃に穴が空くというが、胃どころか身体に風穴が空きそうだ。

部屋にいたところで打開案が出てくるわけもなく、それどころか住人の引越し作業の音が聞こえてきて精神衛生上よろしくない。どうやら夢乃と同じくまだ残っている住人はいるようだ。

ひとまず静かな場所で落ち着いて考えよう。そう思って部屋を出た夢乃は、気がつく
と会社に来ていた。

「とほとほと向かったのは、六階の仮眠室。」

「ついさっきまで、午後からゆっくり出社……などと浮かれていた自分が嘘みたいだ。」

「ここなら静かだし、一人でゆっくり考えられる。それに、始業時刻ギリギリまでいて
も、すぐにオフィスへ飛んでいけるし。」

「……どうしよう……、困ったな……」

仮眠室に入るや否や、泣きそうな声が出た。このままでは確実に路頭に迷う。

大きな溜息をついて閉めたドアに寄りかかる。

そのとき、目の前のカウチソファアの背もたれから、いきなり男性の顔が現れた。

「長谷川夢乃!」

「ひっ……!?!」

大きな声で名前を呼ばれ、驚きのあまり背後のドアに張りつく。薄暗がり目目を凝ら
すと、ソファアの背から顔を出しているのは副社長だった。

「またこの人は、仮眠室でなにをやっているのだろう。今日も寝る場所を探していたと
でもいうのだろうか。」

ドアに張りついたまま副社長を凝視していると、彼もまた夢乃をじっと見てくる。そ

のまま彼は、カウチソファアから下りて近寄ってきた。

目をそらさずにはずんと歩いてくるので、夢乃も目をそらせない。視線が絡んだま

ま副社長が目の前に立ち、夢乃を見下ろした。

「なにをしている? 君は今日、半休じゃなかったのか?」

「は、はい……半休のはずだったんですが、ちょっと事情がありまして……」

なぜ副社長は夢乃が半休だと知っているのだろう。いやそれより、なぜこんな切羽詰
まった顔をしているのだろう。

端正な顔をした男前なだけに、鬼気迫る顔で寄ってこられると迫力があって怖い。戦
きのあまり上手く言葉が出てこない。すると、いきなり強く腕を掴まれ引き寄せられた。

「まあいい、試したいことがある。ちょっとこい」

「えっ、あ、はい?」

引っ張られるままに簡易ベッドの前まで連れてこられると、いきなり夢乃はそこに押
し倒された。

(えええっ!!)

これが驚かずにいられるものか。

「いったいなんの冗談なのだろう。いや、いくら冗談でも、問題ありすぎだ。」

咄嗟に声を出そうと口を開ける。しかしすぐに隣へ寝転がってきた副社長に抱きしめ

られた。

（お戯れはいけませんッ、副社長っ!!）

動揺のあまりおかしなことを心で叫ぶ。だが、あまりのことに、金魚のようにばくばくと口を動かすだけで言葉が出てこない。

いや驚いている場合じゃない。ここは女性として、はつきりと抵抗の意思を示すべきだろう。

夢乃はあてどなく宙に浮いていた両手で副社長のスーツの背を掴み、グイッと力いっぱい引つ張った。当然のことながら、それくらいで彼が動くはずもない。何度も繰り返しぐいぐい引き離そうとしてみてもさっぱりだ。

（いやーっ、わたし、経験ないのにつ！ こんな無理やりなんてやだよお！）

必死に抜け出そうとするも、しっかりと夢乃を抱きしめた副社長の腕はびくりとも動かない。……そのとき、ふとあることに気づいた。

夢乃は抵抗するのをやめて、おそるおそる副社長に顔を向ける。そして、目をぱちくりさせた。

「……副社……長……?」

彼はしっかりと目を閉じて、安らかな寝息を立てている……

（もしかして、寝てる……?）

なんと副社長は、夢乃を抱きしめたまま熟睡していたのだ。

押し倒され抱きしめられてから数秒も経っていない。どれほど眠かったのか知らないが、まさかベッドに倒れ込むと同時に眠ってしまったということか。

（……だからって……、どうしてわたしを抱きしめる必要があるわけ……）

確かに昨日、いつでも声をかけてくれと言っただけ……まさか本当に次の日に抱き枕にされるとは思わないじゃないか！

考えようとするが、頭が回らない。昨日同様、早鐘を打つ心臓が思考の邪魔をする。なにより、男性に抱きしめられているというこの状況が夢乃の頭の中を真っ白にした。

（も……もう、なんなのよお……）

泣きたいのか情けないのか困っているのか、自分のことなのにわからなくなってきた。いや、きっと今の夢乃が感じているのは、その全部だろう。

——カチカチに身体を固めたまま数十分。

夢乃を抱きしめていた副社長の片腕が動いた。同時に顔も動く。どうやら腕時計を確認したらしい。

「……二十分か……。バッチリだな……」

日中に十五分ほど質のいい睡眠をとるだけで、二時間眠ったのと同じ効果があると聞いたことがある。彼の言葉はおそらくそういう意味だろう。

未だ思考停止状態の夢乃は、固まったまま、上半身を起こす副社長を眺める。

そんな夢乃に、彼はとてもいい笑顔を向けてきたのだ。

「思った通りだ。昨日も思ったが、やっぱり君の身体は最高だ！」

「ちょ、ちょっとまずいです、その言いかたっ！」

思わずガバッと起き上がった夢乃を見て、副社長は一瞬不思議そうな顔をしてから苦笑した。

「いい抱き枕だ、って意味なんだが……。そうだな、確かに少々誤解を招く言いかただな」

面と向かって肯定されると、じわじわと頬が熱くなる。恥ずかしさに視線をそらす夢乃に、彼は今さらなことを聞いてきた。

「長谷川さんは、どうしてここに来たんだ？」

「はい……。あ……。よくご存じですね」

そういうえば、抱き枕にされる前も同じことを聞かれた。だが、どうしてここにいるのかとは、夢乃のほう言いたい言葉だ。

「ここにくる前に、企画開発課へ行ったら君はいなかった。ピローチームの半数が今日は半休を取っていると聞いたから、君もそうだろうと思ったただけだ」

「あの、わたしに、なにかご用でしたか？もしかして企画の件でしょうか……」

副社長がわざわざ企画開発課に赴くほどの用事とはなんだろうと、にわかには緊張する。思わずベッドの上で正座をしてしまった夢乃だったが、そんな彼女を見て彼は苦笑した。「仕事が気になるのはわかるが、夜勤明けの半休は社則でも定められている社員の権利だ。きちんと休みなさい。特に睡眠不足はいただけない。仕事にも影響する」

「はい……。すみません……」

半休の予定を無視して出社したことをやんわりと注意されて、しゅんとする。

会社を守る側の人間としては、社員一人ひとりの働きかたが気になるのは当然だろう。神妙な態度で反省している夢乃に、彼は困ったように笑った。正座をした身体を縮める彼女に反して、副社長はベッドの上に長い脚を伸ばし、くつろいだ体勢だ。

「すまない。別に怒っているわけじゃないんだ。そんな顔をされると、まるで俺がいじめられているみたいじゃないか」

「い、いえ、そんな……」

「今のは、長谷川さんが半休と聞いて絶望し、仕方ないと諦めた、俺の愚痴だとも思ってくれ」

「は？」

意味がよくわからない。怪訝な顔で副社長を見ると、なにかを思いついたように話を変えられた。

「そういえば、ここに入ってきたときに『困った』とか言っていたが……。仕事でなにか問題があったのか？　だから半休を取らずに出社したとか」

「ああ、違います。……副社長に、気にしていただくほどのことでは……」

「気になったから聞いている。それとも聞かれたらまずいことなのか？」

「別にまずくはないです……。ですが……。本当に副社長に気にしていただくほどのことでも……。な……。くて……」

夢乃の言葉はだんだんと尻すぼみになる。目の前の副社長の口が、どんどんへの字に曲がっていくからだ。どうやらはつきり理由を言わないことが気に入らないらしい。

「あの……。実は、……。アパートの部屋を、早急に出て行かなくちゃならなくなったんです……」

話すだけならいいだろう。夢乃はそのくらいの気持ちで事情を口にした。

副社長に話したところで、今の状況がどうにかなるとは思わない。だが、一人でもやもやしているくらいなら、一度誰かに話したほうが気持ちを整理することができるのではないか。

うん、なんとなく、前向きに考える気力が出てきたような気がする。

「出て行かなくちゃならないって、恋人と喧嘩でもしたのか？」

「ちっ、違いますっ。一人暮らしです、そんな相手もいませんっ」

予想外すぎる誤解に、夢乃は必要以上に慌てる。ぶんぶん両手を胸の前で振って、焦ったように否定した。

「アパートが取り壊しになることを知らなくて。業者が入るのが今週末だから、金曜日には部屋を出て行ってくださいって、今朝、管理人さんに言われたんです」

「それは、いきなり、なのか？　だとしたら違法だぞ」

「いきなり……。では、ないです……。わたしがお知らせを見逃して……」

そう考えると、やっぱり悪いのは自分だ。

「なぜ見逃した？　大切なことだろう」

そう冷静に聞かれると仕事で叱られている気分になる。つい身をすくめながら夢乃は答えた。

「通知されていたのは半年くらい前かららしいんですけど、ちょうど仕事が忙しくなり始めたときで、まったく他のことが目に入らなかつたというか……。言い訳にしかありませんけど……」

「半年前？　もしかして、今の新商品に関する企画の件か？」

「……はい」

「いくら通知を見逃していたのとしても、いきなり退去勧告はやはり違法だ。君さえよければ弁護士を紹介するが？」

弁護士に相談するなんて聞くと、とんでもなく大事おおごとのような気がしてくる。夢乃は焦って両手を振った。

「い、いえ、弁護士なんて結構ですつ。こっちにも非はありますし、そんな大事おおごとには……。今は時間も……ない状態ですし……」

だんだん声小さくなつていく夢乃を眺め、副社長はなにか考えるように口元に手を持っていく。「わかった。ピローチームに新商品の企画を指示したのは俺だ。……つまり、君が大切な通知を見落とすほど忙しくなった原因は俺にある」

「そつ、そんなことありません！」

それは責任を感じすぎではないか。夢乃は大きな声で言い返す。すると、真面目な顔をした副社長にガシッと両肩を掴つかまれて、ビクッと身体が跳ねた。

「……だから、責任をとろう」

「は？」

「他に目が行かなくなるほど忙しくさせている仕事が片づくまで、俺が君に住む場所を提供する」

「えっ！」

夢乃は思わず身体を乗り出す。住む場所ということは、すぐにでも引越せる部屋がある不動産関係者とお知り合いなのだろうか。

さすがは副社長。仕事ができる人は様々な面で頼りになる。

夢乃の中に、感動にも似た尊敬の気持ち湧き上がる。そんな彼女に、彼はとんでもない爆弾を投下した。

「俺のマンションにこい」

——夢乃の笑顔が固まる。

(……誰の……、マンションに、こい……と……?)

言葉の意味をそのまま受け取ろうとして、慌てて別の意味に違いないと思ひ直す。

これはきつと、副社長と同じマンションの別の部屋に住めばいい、ということだろう。「お気持ちはありがたいですけど、無理ですよ……。ふ、副社長がお住まいになっているマンションは、きつとお家賃もお高いでしょうし……」

動揺するあまり笑みを引きつらせる夢乃に、彼は二発目の爆弾を落とした。

「なにを言っている。引越すのは俺の部屋だ。当然、家賃はいらぬ」

今度こそ、全身を固まらせた夢乃に気づくことなく、副社長はどんどん話を進めていく。彼女の肩から手を離し、向かい合つて胡坐あぐらをかいて話しあう体勢をとった。

「マンションの部屋は3LDKだ。使っていない部屋がひとつあるから、そこを使うといい。家賃や光熱費など諸々の生活費は不要だ。その代わり……」

「無理です、無理です、無理です、むりですうっ!!」

夢乃は慌てて首を左右にぶんぶん振る。彼はまだなにか言いたそうだったが、それを黙って聞いている心の余裕がない。

よりによって、なんとということを出すのだ。副社長が住んでいるマンションの部屋を間借りするなんて、とんでもない。

「そんなことできるわけがないじゃないですかっ！」

「じゃあ、他にあてはあるのか？」

副社長の冷静な一言に、夢乃は言葉に詰まる。

他にあてなど……ない。

期限は実質、明日まで。引越すにしても、仕事をしながら、各種手続きと部屋の荷物をまとめることなど、到底一人でできるはずがない。

なにより、肝心の住む場所が決まらなければ荷物を抱えて路頭に迷うだけだ。

……どうしてこんなことになってしまったのだろう。もちろん、うっかりしていた自分のミスだとわかっている。でも、どうしてそれが今なのか。せっかく、初めて自分の企画が形になりそうなきなのに……

そう思うと、自分が情けなくて悔しさが込み上げてくる。

ふと、慎一郎に相談してみようかと思いつく。兄は昨日、自分のマンションへ引越してこいと言っていた。あのときは断ったけれど、背に腹は替えられない。

ぐらりと、心が揺れた。

しかし、そんな自分を押しとどめ、夢乃は耐えるようにギュッと目を閉じる。

いつもは過保護過ぎる兄の手助けを突っぱねているのに、こんなときだけ頼ろうとする自分を、さらに情けなく思った。

「そんな顔をするってことは、他にあてはないんだろう？」

「ない……です。でも……」

「話は最後まで聞け。俺は君を助ける。その代わりに、君も俺を助けてくれ」

「助け……る？」

その言葉に顔を上げると、なぜか副社長はとても真剣な顔をしていた。彼ほどの人が、いったい自分になにを助けろというのだろう。

次の言葉を待ちながら、夢乃はごくりと唾を呑み込んだ。

「俺の、抱き枕になつてくれ」

必死な顔で紡ぎ出された言葉に……夢乃の息が止まった。

それどころか、ドキドキとうるさかった心臓の鼓動まで止まったような錯覚に陥る。

「どんなことをしても眠れなかった俺が、昨日、君を抱いた途端に眠れたんだ。偶然かと思ってもう一度試してみたが、やっぱり君を抱いたら眠れた」

抱いた、はやめてほしい。言われるたびに別の意味に聞こえて恥ずかしくなる。

つまり、彼が企画開発課に夢乃を訪ねてきたのも、ここでいきなり抱きついてきたのも、夢乃を抱き枕にして眠れるかどうかを確かめるためだったということだ。

「間違いない、君がいれば俺は眠れる！」

「そ、それって……、今みたいに、お昼寝の際の抱き枕になれてことですか……」

震える声で確認を取る。なんとなく笑みは浮かぶが、口元は引きつり冷や汗がにじんできた。

夢乃の様子を意に介さず、副社長は真面目な顔であっさりと言い放つ。

「同じ部屋に住むんだ。夜に決まっているだろう。仮眠室でも十分に休めたということ、自分の部屋のベッドなら、きっと朝まで熟睡できるはずだ」

「無理です、無理です、無理です、むりですうっ!!」

夢乃は声を大にして必死に首を左右に振る。正座をしたまま背筋が伸び、両手は皺しわになるくらいスカートを握りしめていた。

そんな夢乃に、副社長が前のめりになって詰め寄ってくる。再びガシッと両肩つかを掴つかまれた。

「君を抱けば、俺は眠れるみたいなんだ！」

「むりですっ!!」

(だから、その言いかたをやめてくださいってば!)

ずっと首を振っていたら頭がくらくらしてきた。だが、たとえ振らなくてもめまいがしそうな状況である。

「頼む、俺を助けてくれ！」

副社長は必死だ。声も必死だが顔も怖いくらい必死だ。

「だって、一晩中一緒に寝るんでしょう!?! そ、それも、抱き……み、密着した状態で! 男の人と……、それも副社長を相手に、そ、そんなのできるわけじゃないじゃないですか!」

夢乃だって必死になる。掴つかまれた肩を離してくださいといわんばかりに身体を引いて、必死で口を動かした。

「君がなにを心配しているかはわかる。だから、絶対に手は出さないと約束する!」

「そんなこと言われてもですね!」

「君に手を出すより、睡眠のほうが大事だ!」

はつきり断言された言葉に、夢乃はビタリと動きを止める。

……なんか今、女性としてすごく失礼なことを言われたような気がする。

「頼む!」

だが、その失言に気づかないくらい、副社長は必死に夢乃に頭を下げてくる。

(どうして、こんなに……)

どちらかといえば、「頼むから助けてくれ」と言うべきなのは夢乃のほうだ。すぐにも住むところを探して引越さなければ、週末には家財道具一式を抱えて路頭に迷うしかないのだから。

それなのに、いつの間にか副社長のほうが必死になっているように思う。

夢乃から手を離し真剣に見つめてくる顔を、彼女はジッと見返した。

怜悯さを感じさせる双眸の下に、うつすらと隈が見える。

それに気がついた瞬間、ギョツと胸が痛くなった。

副社長は、本当に不眠症に悩まされているのだ。

そんな彼が、夢乃という希望を見つけた。大げさかもしれないが、副社長がここまで必死になるのは、きつとそうした理由からなのだろう。

「俺は仕事をしたい。だが、今の状態ではベストな仕事ができない。眠れないのに睡魔は襲ってくるし、効率が落ちていく一方だ。これでは、来月のコンペもどうなるか……」

夢乃はドキリとする。副社長が中心となっている来月のコンペといえば、今夢乃が必死になって詰めている企画が関係してくるものだ。それこそ、アパート取り壊しの通達を見落としてしまうほど熱中している案件ではないか。

(副社長も、必死なんだ……)

自分と副社長は同じだ。ギリギリまで追い詰められ、必死に解決策を探している。

だが、そんな二人が手を取り合えば、問題は一気に解決するのである。

「……わかりました」

夢乃は意を決して副社長をまっすぐに見つめると、深く頭を下げた。

「しばらくお世話になります」

こうして夢乃は、差し当たって住居問題を解決することができたのである。

あの後、とりあえず昼食を取り、ひと息ついてから出社した夢乃だったが、落ち着いて考えるとすごいことになってしまったと思う。

(副社長と、一緒に暮らすとか……)

とてもじゃないが普通では考えられないことだ。でもこれは夢ではないのである。

『そんなに硬くなるな。世話になるのはお互い様だ。そうだ、ルームシェアだと思えばいい』

ルームシェアという言葉には、なんとなく対等な立場の人間が部屋を共有するイメージがある。

だが副社長と夢乃は、明らかに対等ではない。実際に夢乃はただで部屋に住まわせてもらうのだから。しかも……

『ルームシェアといっても、抱き枕を承諾してもらえたことは俺にとって大きな利益だ。』

家賃や光熱費といった生活費一切をもらわないのは、その利益に対する当然の対価だから気にするな」

それはいけない。仮にも住ませてもらうのに、生活費をなにも支払わないのは申し訳ないと伝えたが、副社長は頑として受け入れてくれなかった。

それどころか、『むしろ、抱き枕になってくれるなら、一晩いくらで契約してもいい』とまで言い出す始末。

……それは、なにか違う商売のようだ……

彼はいったい、どれだけ切羽詰まっていたのだろう。

あの冷静で堅実な仕事を常とする副社長にそこまで言わせるとは、生死にかかわるレベルといっても過言ではないような気がする。

だけど、相手は自分が勤める会社の副社長で男性だ。しかも、抱き枕……

手は出さないとはいわれたが、信用してもよいものなのだろうか。いや、あれだけ死だったのだから、信用してあげなくてはかわいそうだ。

しかし男女が同じ屋根の下にいて、「絶対」にというのは……どうだろう……

今さらだが、早まったか……という気持ちが湧く。

本当にこれでよかったのだろうか。

とはいえ、副社長が必死なら夢乃だって切羽詰まった状況だ。路頭に迷うか安息の地

に落ち着けるか、その瀬戸際なのだ。

今日からでも引っ越しの準備を始めなくてはならない。まさしく焦眉の急という事態なのだ。

(引っ越し……)

そう考えて、引っ越しの荷物とは、どうまとめたいものかと考える。一人で準備をするなんて初めてのことだ。一日やそこらで終わるだろうか。

そういうえば、ルームシェアなるものが決まったのはいいが副社長の住所とはどこなのだろ……

(ちょっと待って！ 不安しかないっ！)

いろいろ考え泣きたい気分になっていると、課長がデスクから声をかけてきた。

「長谷川さん、副社長が呼んでるよ」

「はいっ!?」

夢乃は思わず立ち上がってオフィスの出入口に顔を向ける。すると課長に笑われた。

「違う違う。副社長室に来てくれっさ」

課長は手に持っている受話器を夢乃にかかかけて見せる。

「副社長直々の呼び出しだ。すぐに行ってこい」

「は、はい」

一瞬、ルームシェアの件だろうかと思つた夢乃は、慌てて考えを改める。今は仕事だ。そんなときにプライベートなことでは社員を呼び出すなど副社長がするはずがない。

「期待されてるだけあるじゃない。がんばってっ」

うしろを通りかかった梓にもエールをもらい、夢乃は「はいっ」と張り切つた返事をする。

こうやって言われると、どんなに大変でもやる気がふくらんでくるものだ。

軽い足取りでオフィスを出て、エレベーターホールへと向かう。

夢乃が勤める本社ビルは十階建てだ。一階は店舗を兼ねた大きなショールームになっていて、すぐ上の二階は商品管理室になっている。そして、三階から八階が従業員フロアで、これから向かう副社長室は九階だ。最上階は社長室や重役会議室、応接室などになっている。

副社長室のある九階は、他に各重役室と秘書課が置かれていた。一般社員がそうそう用のあるフロアではないため、夢乃も過去に数回、秘書課へきたことがある程度だ。

そう考えると、なんとなくドキドキする。たとえるなら、高級百貨店の貴金属フロアを、たつた一人で歩いているときのような緊張感だ。

副社長室など、もちろん初めて行く。

立ち読みサンプル はここまで

エレベーターを降りると、まず他のフロアに感じる騒がしさが一切ないことに身体が固まる。

足音を立てるのさえもはばかられる雰囲気だが、ありがたいことに床には絨毯が敷かれており、さほど足音は響かないだろう。

副社長室の場所を知らなくても、エレベーターの横に、妙に小洒落たアルミ製のフロア案内板がある。それを見て目的の場所を確認していると、うしろから声をかけられた。「どこかお探し?」

感じのいい綺麗な声だ。振り向くと、声をそのまま人の姿にしたような綺麗な女性が立っている。

この階には秘書課もあるので、雰囲气的にも秘書課の女性社員だろう。

「はい。副社長室を……」

「副社長室?」

笑顔の中で、眉がピクツと寄つたような気がする。

「副社長室に、なんのご用かしら?」

わずかだが、さつきより声がきつくなつた気がした。なんとなくイヤな予感を抱きながら、夢乃は笑顔を取り繕う。

「あ、あの……、新商品の企画の件で呼ばれていて……。失礼します!」